

「オイ喜イ公。押入へ遣入つても襖を開けといたら何にもなれへんがな。閉めときんか。」

「チョツトの間開けといてんか。」

「何んでやね。」

「臭いのんや。」

「濕氣で臭いのか。」

「いや今遣入るなり屁を放いたんや。」

「何をするね阿呆やなア。閉めとき。」

「時に源やん。」

「オイ清やん。お前衝立の上から首を出してどうするね。」

「イヤ、じきに遣入るが云ふとくで。彼奴、なか／＼口の巧い奴やで、程の宜い事を云はれて、ふんさうか／＼と云ふ様な事しいなや。」

「大丈夫や、心配しいな。首を引込めて。」

「ナア、源やん。」

「なんぢや、喜イ公。襖を開けて顔を出してどうするね。閉めときんか。」

「今清やんの云ふた通り、あいつ口が上手やさかいに、お前ごまかされたらあかんで。」

「そんな事心配せいで大丈夫や。顔を出しな。」

「ナア源やん。」

「オイまた首出した。なんや清やん。」

「あいつ出て來たらいきなりボン／＼となぐりや。それから話に掛りや。」

「そんな事をせいで、俺に任しとき。」

「ナア源やん。」

「ナンヤチオイ／＼。掛け合ひで顔を出してる。」

「今清やんが云ふた。ボンとなぐりと云ふたけども、あんまり手荒い事をして遣りなや。相手は女の事やで、若しもなぐる様な事やつたら、私イの頭ですましとき、可哀想な。」

「まだあんな事を云ふてよる。オイ來よつたらしい、閉めとき。」

「ヘエ、小照さん送ります。」

「米どん、御苦勞はん。これほんの紙だけやし。」

「お女將。濟みまへんな。何時も御心配になりまして。大きに。小照さん、何も用事おまへんか。」

「ハア、後で一遍尋ねとう。お母ちゃん大きに。」

「良う出來たしなア。此方のん來て、やし。」